

グスタフ・マーラー Gustav Mahler

交響曲 第3番 二短調

Symphony No.3 in D minor

- 第1楽章 力強く、決然と
Kräftig. Entschieden
- 第2楽章 テンポ・ディ・メヌエット.非常に穏やかに
Tempo di menuetto. Sehr mäßig
- 第3楽章 コモド.スケルツァンド.急がずに
Comodo. Scherzando. Ohne Hast
- 第4楽章 きわめてゆるやかに.神秘的に
Sehr langsam. Misterioso
- 第5楽章 活発な速度で.表出は大胆に
Lustig im Tempo und keck im Ausdruck
- 第6楽章 ゆるやかに.平静に.感情をこめて
Langsam. Ruhevoll. Empfundener

指揮・芸術監督:佐渡 裕 Yutaka Sado, Conductor & Artistic Director

メゾ・ソプラノ:ミシェル・デ・ヤング Michelle De Young, Mezzo Soprano

共 演:マーラー・チェンバー・オーケストラ Mahler Chamber Orchestra

女 声 合 唱:オープニング記念第9合唱団

Opening Beethoven 9th Commemorative Chorus, Female Chorus

児 童 合 唱:大阪すみよし少年少女合唱団 Osaka Sumiyoshi Boys&Girls Chorus, Junior Chorus

管 弦 楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2011 6/17(金)・18(土)・19(日) 3:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

助成:公益財団法人 ロームミュージックファンデーション



平成23年度優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業



3分ですぐわかる 今回の聴きどころ

豊かな音楽による大河の中で、自然や人生の意味などを描く大作。

《巨人》と呼ばれる青春賛歌の交響曲第1番、《復活》というタイトルが付けられた死生観の表現である交響曲第2番。作曲家としての存在感を世に示した2曲に続く交響曲第3番は、第1番における自然との対話を継承し、さらには作曲当時ヨーロッパでセンセーションを巻き起こしていたフリードリヒ・ニーチェの思想を反映。その美しくも深い考察を、なんと1時間30分を越える壮大な音楽世界としてまとめあげた大作である(過去にはギネスブックにも「世界でもっとも長大な交響曲」として掲載されていたほど!)。多くの打楽器を含む多彩な4管編成のオーケストラに声楽を加えた野心的なスコアは、第3番にして早くも集大成と言えるような充実ぶりだ。

21世紀の音楽シーンをリードしていく2つのオーケストラが合体!

その名前に「マーラー」をいただくマーラー・チェンバー・オーケストラは、1997年に若手音楽家を中心として結成。メンバーは約50名ほどで、モーツァルトやベートーヴェンの交響曲が似合うサイズ。PACオーケストラとの共演が実現し、大編成を要するマーラーの交響曲を演奏できることは、双方の楽員にとってたいへんに意義深い。互いの音を聴き合いながらミックスさせ、ここでしか生まれない音楽を聴かせてくれるのは、聴衆にとっても大きな幸福だ。マーラーの作品は彼自身が優れた指揮者だったためか、各楽器の可能性を追求し、表情や演奏法の指定も細かい。そこに集中して対応する各奏者の真剣な眼差しは、私たちに「観る楽しみと感動」も提供してくれるはずだ。

オヤマダアツシ(音楽ライター)

PROGRAM NOTE

演奏をより深く楽しむために—— 曲目解説

オヤマダアツシ(音楽ライター)

マーラー:交響曲 第3番 二短調

「あなたはもう見る必要がないんです。だって私がすべて音楽にしてしまったのですから」
1896年の夏、マーラーお気に入りの避暑地であり、夏の間に集中して作曲をする場所となっていたシュタインバッハという湖畔の地(ザルツブルクの東)を訪れたアシスタントのブルーノ・ワルター(マーラー没後に彼の伝道者となる指揮者)は、目の前に広がる自然を見ながらこの言葉を聞かされたという。その「音楽」とはまさに交響曲第3番であり、前年の夏には第2~第6楽章がすでに作曲されていた。

30代の前半から中盤にかけて、指揮者としての名声が高まり多忙となったマーラーは、オフ・シーズンとなる夏の間を作曲にあてるようになり、シュタインバッハの環境から大きなインスピレーションを得ていた。加えて、多くの音楽家も影響を受けたニーチェの思想、特に有名な『ツァラトゥストラはこう語った』に感銘しており、それは各楽章に付けられた短いタイトルにも反映された。ちなみにまったく同時期の1896年には、偶然にもR.シュトラウスが同名の交響詩を発表している。

そうした中で生まれた交響曲第3番には、かつてレコードなどでも「夏の朝の夢」といったニックネームが付けられていた。静かな森のささやきと湖面のゆらぎ、森の中から聞こえる妖精たちや動物たちの密やかな声などが源泉となっているのは間違いなく、それはシェイクスピアの『真夏の夜の夢』における神秘的な世界観とも共通する。この壮大な交響曲は、聴き手をそうした世界へと誘ってくれるものであり、シュタインバッハでマーラーが見て感じたものを疑似体験する装置としても機能することだろう。マーラーは当時の恋人であったアンナ・フォン・ミルデンブルク(歌手)に送った手紙の中で、

この曲を「全世界が投影される巨大な作品」「誰も聴いたことのない音楽」「すべての自然が深い秘密を語り出す」などと表現している。

1895年と翌96年のふた夏に作曲されたこの曲は、1902年になってマーラー自身の指揮で初演され、成功を収めた。なお以下には、作曲時のインスピレーションとなったであろうタイトルを参考までに記しておこう(「」内に表記)。

第1楽章 「パン(牧神)の目覚め。夏は進み行く、またはバッカス(酒の神)の行進」

大地の響きを思わせる力強いホルンのファンファーレに始まり、夢うつつのファンタジックな音楽や勇壮な行進曲などが次々と現れては消え、また蘇ってくる。約30分を要する壮大な世界。

第2楽章 「牧場で花が私に語ること」

優美なメヌエット舞曲による音楽であり、繊細な音楽と、マーラー特有のややせわしない音楽(交響曲第2番や交響曲第4番にも共通する部分がある)が交互に登場する。

第3楽章 「森の動物たちが私に語ること」

主に木管楽器群が鳥のさえずりを表現するなど、可愛らしさと躍動が作り出す軽快な音楽。中盤にはポストホルン(郵便馬車が合図に使用する信号ラッパ)が、遠くのほうから聞こえてくる。最後には、まるで「夢から覚めよ!」とばかりに賑やかな音楽で終わる。

第4楽章 「夜が私に語ること、人が私に語ること」

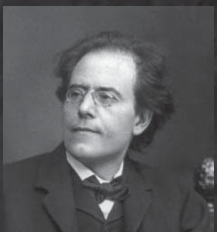
交響曲第2番の第4楽章(原光)を思わせる、思慮深いアルト(またはメゾ・ソプラノ)独唱の歌。歌詞は『ツァラトゥストラはこう語った』からの一節。

第5楽章 「朝の鐘が私に語ること、天使が私に語ること」

児童合唱が鐘の音を歌って始まり、空から光が降り注ぐような音楽が奏でられる。もともとはこの作品の第7楽章として構想された交響曲第4番第4楽章の一節も顔をのぞかせる。

第6楽章 「愛が私に語ること」

大自然に抱かれる心の平安と、豊かな愛、大いなる神への讃美などが、ひとつの大きな流れとなって響くフィナーレ。



歴史に名を刻む偉大なる作曲家

グスタフ・マーラー(1860—1911)

Gustav Mahler

昨年は生誕150年、今年は没後100年としてクローズアップされる彼の作品は、今やオーケストラにとって欠かせない存在。生涯、指揮者として欧米の有名なオペラハウスやオーケストラを指揮し、その合間を縫って作曲していたため作品数は少ない。しかし1曲1曲が内容の濃い小説のように深い世界観を持ち、そこにはまっぴらと抜け出せない魅力がある。19世紀から20世紀に至る後期ロマン派音楽の中で、オーケストラの可能性(特に音色や奏法)を広げ、同世代のR.シュトラウスと共にオーケストラの色彩感を拡大した功労者でもある。